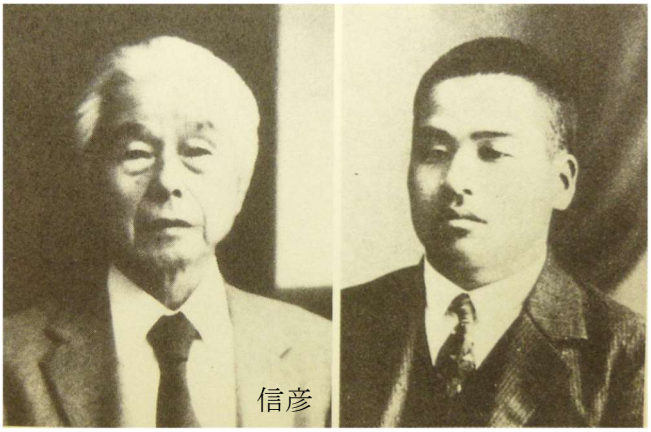
まごころの人　後藤圀彦・信彦兄弟

那珂市歴史民俗資料館

昭和初期の農村不況に直面し、児童生徒へ無限の愛情を注ぐと共に 農村復興のために愛郷会設立に奔走した東木倉村出身の青年教師兄弟

〈川田小学校同僚:蓮田捷述記、後藤道彦氏提供〉



何年か前、信彦先生から保坂正康著の『５・１５事件』の書籍を頂いたことがありました。逝去された今、資料として大いに役立っていることは不思議に思えてなりません。

先生の生家は村の旧家で、御尊父（武彦）は元県議でした。その頃先生は土地の五台小学校に勤めておりました。私も同校に勤めて居った仲で、数多い思い出が残っております。その頃は、まだ兄弟村の話題はありませんでした。話は前のことになるが、後藤家と橘家とは先生の祖父時代から親交があり、尊父武彦先生がある時こう云った。「橘家には元一高（現：東大教養部）まで進みながら中退し、孝三郎先生を中心に兄弟村をつくり百姓をやっている。」

これを聞いた信彦先生は非常に感銘し、それから度々兄弟村に足を運び先生の熱烈な農村問題の話を聴いているうちに益々感銘を深め、これは一人で聴くのはもったいない、多くの者に聴かせ疲弊せる農村振興に寄与したいという考えを強く持ちました。それから授業が終わると村の篤(とく)農家・中堅青年・学校の先生を訪ね歩き、夜遅くまで勧誘に専念し、時には自転車諸共相当の高所より落ちたこともあるとか。こうした誠意は村の有志達に通じないわけはないと思います。やがて兄弟村を訪ねる者が日に日に数を増し誰も橘孝三郎先生の話に共鳴した。こうして愛郷精神は村々に浸透して輪を拡げていったのであります。

これ迄に到ったご苦労は話に尽くせない程であったと思います。これからもまだまだ東奔西走の日が続いたのであります。村の有志・先生を動かして学校で講演会を開くよう信彦先生は考え、孝三郎先生に相談すると快諾され、第１回は五台小学校で開催されました。それから次々村から講演会の要請があり、いよいよ軌道に乗りました。ある時辺鄙な村の講演会の帰り、馬車に揺られながら両先生が話し合っているうちに次第に話はある一点に集中しました。即ち、組織をつくることでありました。名前をつける段になると、愛郷会・ふるさとを愛す・土を愛す、色々出たうち結局「愛郷会」に落ち着いたわけです。そして信彦先生は、愛郷会の発足を容易にしようと孝三郎先生に原稿をたのみ、これをいはらき新聞に掲載を申し込んだところ社の方でも孝三郎先生のことは知っていたから容易に掲載されました。会をつくる準備は逐次進展していきました。即ち、孝三郎先生が会則の前文を書き、信彦先生が会の会則や趣旨をまとめることにしました。「汎(あまね)く農村青年に檄(げき)す」と題して相当部数つくり、それを講演のたびに撒くことにしたのです。会の運営に当たっては、本部を兄弟村（現新原町）に置き、事務所は五台村東木倉、信彦先生の自宅に置きました。その頃兄の圀彦先生が先のパンフレットに共鳴し、孝三郎先生の話に賛意を示し積極的に動くようになり、実に心強いことです。

昭和４年（1929）９月中旬には兄弟村で愛郷会準備会が開かれるほどになり、その頃の記憶をたどってみると、集まった顔ぶれは兄弟村から孝三郎先生、林正三先生、橘徳次郎先生、地方

から信彦先生兄弟、後藤文先生、蓮田捷外に１０人近い自作農の青年が集まりました。

会の状況の一部を述べてみると、橘先生は両手をがっちり組み、両眼を閉じて天地の神々に誓いをたてる如く暫く祈るような御様子でありました。きわめて宗教的な雰囲気のなかに厳粛なうちに会は進行しました。正式の発会式は、菊薫る１１月で集まる人数も大勢でした。

愛郷運動に信彦先生が熱を入れすぎ学校教育が手薄でなかったかという疑念をいだかせるが、さにあらずで、児童教育に当たっては、教育者の誰も出来ないことが多々ありました。一例をあげてみるなれば、児童に対しての愛情には頭が下がります。昭和５年頃の農村は話に尽くせない疲弊困憊その極に達し、従って欠食児童も多くあり、又楽しい遠足にも行けない児童もありました。先生はそれらの児童達に、外に知れないように御自分の弁当の半分を分け与え、また日頃困っている児童のために貯金をしてそれらを児童に与え、遠足に参加させました。今の学校教育にこうした愛情があったなら、いやな問題は起こらないと思います。

話をまとめますが、以上は信彦先生の業績の一部に過ぎませんが、要するに先生は愛郷会発足の助産婦的な存在であったと信じます。

愛郷運動に御兄弟が心血をそそがれたが、圀彦先生は先に、信彦先生は最近（昭和６１年３月２０日）御他界されました。御両人が愛郷運動に身を犠牲にして尽くされた功績は偉大であったと信じます。こうなってみると、外の場合と違って、「両先生があの世で定めし語り合っているだろうな―。」と感じがしてなりません。この機会に両先生の御冥福を御祈り申し上げ、信彦先生の思い出の一端といたします。

世なおしを　共に語りし君はいま　櫻またすに　語る声なし

後藤圀彦・タケ夫妻「留魂碑」建立（昭和 44 年（1969）12 月 7 日／那珂市東木倉の後藤家墓所）

（墓前祭：碑の前で　後藤道彦氏提供）

（追悼文）

〈塙　三郎〉

（圀彦について）西郷隆盛のような凛々しい立派な風貌と断じて行うという心意気に、私どもは心から敬服しておりました。・・・農村の荒廃と欠食児童に弁当を与えたことを、（５・１５事件の裁判で）紅涙（こうるい）ともに下る切々たる陳述は、さしもの稲垣裁判長も木内検事も並みいる傍聴者の人々も涙なしには聞くことはできませんでした。・・・農村を救えの先生の御志は立派にあの当事の国民の人々に徹底されました。

〈古内栄一／教員〉

昭和５年（1930）夏、塾長（橘孝三郎）の講演が那珂湊の小学校で開催され拝聴、圀彦先生は青年隊長として活躍、温厚篤実で校長や同僚の信頼も厚く、児童の大兄（圀彦）を慕うこと慈父の如く、大兄また児童を愛すること限りなし。

〈後藤圀彦／昭和９年２月９日下獄の日、弟信彦のために〉

敷島の　大和錦を心して　身をハ鍛へて　亦もつくさん